

「地図は現地ではない」。言葉は、物事の特徴や本質を言い表す記号であって、「コトバはモノそのものではない」の比喩である。一般意味論の全ての原則はここから派生している。政治や生活の中などにある「言葉によるまやかし」（言葉の魔術）も、様々な「誤解」も、コトバと実際の物事の違いから生じる。一般意味論は、1933年、ポラード系アメリカ人のコージブスキーによって唱えられた理論である。大戦後も日系二世のS・I・ハヤカワ（著書「思考と行動における言語」はロングセラー）らの活躍によって、広範囲な影響力を持った。

今こそ「批判的思考力」育成を

ない。もともとクリテリオン（尺度、基準）というギリシア語に由来し、相手をやっつけるとか、揚げ足を落とすということではなく、物事を一定の基準から評価することである。

「批判的思考」は、アメリカの国語教育で重視されている概念の一つであり、PISA（OECDによる学習到達度調査）の上位国のフィンランドでは、国語科の重点目標5項目のうち、「論理力」と「批判的思考力」の二つが入っている。

日本でも遅まきながら「批判的思考」を取り上げようと考えた時期があった。それは2003年のPISA（41カ国実施）の結果が、読解力で前回の8位から14位へと転落したことと起因する。読解力が落ちたのは、「情報の取り出し、」

見。そして「この二つの文章のうち、どちらに賛成しますか？」「どちらに賛成するかは別として、どちらの方が良い手紙だと思えますか？」などと問うのである。

どちらの問いに答える場合も、文章の内容にふれながら答えなければならぬ。このような熟考・論述（自由記述）に関する問題に対しての無答率が、他の先進国と比べて際立っている。無答が多いのも、無理はない。教師主導の知識・理解中心の授業が展開されてきたからである。そこで、

情報の真偽を

見極める力

リーディング）が重要であるとした。日本もやっと欧米並みになると期待したが、その後なぜかトーンダウンし、学習指導要領には反映されなかった。

日本社会の現状を見ると、批判的思考力の対象になっっている「言葉の魔術」は横行しているし、教育界においても、メディアリテラシーに関連して、批判的思考力の存在意義は、ますます大きくなっている。さらに言えば、批判的思考力を身につけることは、客観的な判断や決断ができることにつながり、ビジネスの世界でも充分に役立つと思われる。

一般意味論は、「批判的思考」と同じ概念である。「批判的」(critical a)と言っても否定では



名古屋経済大学
人間生活科学部特任教授
加藤 昇

し、「解釈」、「熟考・評価」の問題のうち、とくに「熟考・評価」に課題があった。

たとえば、「落書き」の問題。落書きに関する二つの意見を素材文にしたもの。一方は「落書きは芸術だからしてもかまわない」という意見。もう一方は「落書きは人の迷惑だからしてはいけない」という意

かとう・のぼる 国語教育。名古屋大学商学部。学士。

